

ア ジ ア 太 平 洋 の 人 を つ な ぎ 学 び を 育 て る

# ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

# news

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 発行

特集

海外との

協働プロジェクト進行中

タイ教職員招へいプログラム……6

インド教職員招へいプログラム……7

「ESD推進の手引」研修……8

ユネスコスクール

全国ネットワーク強化会議……8

全日本高校模擬国連大会……9

奈良 国際シンポジウム……9

コラム「法人維持会員訪問記」……10

コラム「東奔西走」……10

活動メモ……11



No. **401**

2017年2月号



ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO



## 若者プロジェクト・ワークショップに参加して

参加者の「持続可能性」に関する視点の変化が有り、クリアになりました。私たちはフィリピンの北島に位置するバギオで立ち上がった10人ほどの小さなNGOです。自分も変わり、コミュニティも変わるというサイクルを作っていきたい。ACCUには、知識的なリソースを集約する場であってほしいし、それをスケールアップしていくことも望んでいます。

**piled** Philippines  
Ramon Mapa氏



プロジェクトは今年始まったばかりですが、テーマは「水・教育・生物多様性」の3つです。私たちCEEは、教育分野では子、親、学校の先生の相談にのるカウンセリングを行い、就学率100%をめざしている団体です。日本は安全で楽しく、何度も来ています。ACCUには、いろいろな分野で意見交換ができるプラットフォームになってほしいですね。

**CEE** India  
Centre for Environment Education Ramesh Savalia氏



初めて来日しましたが、東京はとても美しいですね。バングラデシュは人が多くて町が混沌としています。プロジェクトを始めて、若者が自分たちの価値に気づいて自発的に行動するようになったと感じています。活動拠点であるゴノケンドロ\*1は3000近くにまで増え、各コミュニティが自分たちの力で運営しています。ACCUには日本での研修を行ってほしいです。

**brac** Bangladesh  
Nazrul Islam氏



若者は、自発的に社会に対して問題意識を持ち、行動につながられるようになりました。ケースごとに問題を伝達したり活用したりすることができます。今後は、プロジェクトを実施する地域を拡大し、地域ごとの連携を図りたい。ACCUには、ぜひプロジェクトを継続し、相互交流と技術的なサポートをお願いしたいです。

**Sanjiv Preet Organization** Pakistan  
Pervaiz Akhtar氏



# 特集 ■ 海外との協働プロジェクト 進行中!

ACCUの教育協力事業では、ESD\*の推進を目標にアジアの国々と協働プロジェクトを実施しています。2016年秋には3つのワークショップを東京で開催し、それぞれの進捗状況を共有し、今後の進展に向けて熱心に議論しました。関連プロジェクトと共にご紹介します。

## 若者主体の持続可能なコミュニティ開発プロジェクト 未来学の知見も取りいれて

世界のどのくらいの人口がユース（若者）と呼ばれているのでしょうか？ 約18億人、世界人口の25%がユース（若者）世代であると言われています。持続可能な社会の構築のためには、未来を担う若者が持続可能な社会の実現を目指す一員であるという自覚を持ち、自ら行動していくことが必要です。

2014年から開始した本プロジェクトは、今年度で3年目を迎えます。これまで共に活動してきたサンジブプリート（バキスタン）、BRAC（バングラデシュ）と、今年度から始動したCEE（インド）、PILCD（フィリピン）を東京に迎えて、10月12日から3日間、国際ワークショップを実施しました。

5月にタイで開催したワークショップに引き続き、講師としてハワイ大学教授ジム・データー氏、アドバイザーとしてユネスコバンコク事務所三浦うしほ氏をお招きしました。データー氏は未来学が専門です。ESDと未来学、そしてその

知見を本プロジェクトにどのように落とし込んでいけるのか。その可能性について、データー氏、三浦氏、各団体のコーディネーター、そしてACCU教育協力部職員とで熱い議論が交わされました。未来学は、単に未来を「予期す

### DATA

プロジェクト名：若者主体の持続可能なコミュニティ開発プロジェクト 2014-17  
プロジェクト参加国および人数（2016年10月）：バングラデシュ（2910か所のゴノケンドロが活動拠点）、インド（40の村で125名）、バキスタン（117名）、フィリピン（国内各地で活動）、インドネシア（団体名XL Future Leader Program、若者300名\*インドネシア全土より参加した大学生を対象にしたリーダーシップ育成プロジェクトと協働で実施）

国際ワークショップ日程：2016年10月12日～14日  
会場：東京・池袋  
参加者：インドネシア以外の4か国のコーディネーター、講師、アドバイザー



データー氏

る(predict)」ことではありません。多様な視点から未来を創造し、どんな未来がやってきても対応ができるように多くの代替案を考えるプロセスそのものです。そのためには、現在を見て、過去を振り返ることも重要となります。5月の国際ワークショップで内容を深めた6ステップに、この未来学の要素を組み込み、さらにバージョンアップした持続可能なコミュニティ開発を実現す

るファシリテーターズステップを現在考案中です。今後、2016年までの成果に加え、各国のコーディネーターの経験と実績、そして未来学の知見を踏まえた「若者主体の持続可能なコミュニティ開発のためのガイドライン（仮称）」を作成します。来年度に完成予定です！楽しみにお待ちください。

（教育協力部 篠田真穂）

## 五本木小学校を訪問しました

ワークショップの最終日、希望者と共に目黒区立五本木小学校を訪問しました。五本木小学校は昨年、サステイナブルスクールに認定されました。学校見学後、バキスタンの参加者からは「バキスタンでは所得の高い層の子どもたちしか行くことできない学校（施設）に、日本の子どもたちは全員通う機会がある。それは素晴らしいことだ」という言葉がありました。国連では、ユース（若者）を18歳～35歳と定義しています。日本の義務教育における子どもたちの豊かな学びが、後に彼らが「ユース」になった際の原動力になるのではないのでしょうか。貴重な機会をくださいました五本木小学校の

皆さん、ありがとうございました！  
なお、五本木小学校では昨年9月に「再生」をテーマとして「木々との対話」展を開催されました。樹齢400年以上のいちじょうの木とのふれあいからユネスコスクール委員会の子どもたちが持続可能性について考える機会になったとのこと。詳細な活動報告はユネスコスクール公式ホームページをご覧ください。



中央が校長の上田秀穂氏、一番右が三浦氏

\*1 ゴノケンドロ：多目的コミュニティセンター（誰でも使用できる場所） \*2 ユネスコスクール加盟校  
\*3 サステイナブルスクール：ESD分野で、ユニークで魅力的な取り組みを行っている「重点校」として採択された学校  
\*4 活動の6段階指針 1想像する 2見る 3考える 4行動する 5示す 6評価する

\*ESD：持続可能な開発のための教育



# ESD Foodプロジェクト2016

## 膝つきあわせ、課題に取り組む

2011年から続くACCUCの国際協働学習プロジェクト。今年度も昨年度に引き続き「ESD Foodプロジェクト」を展開しています。タイ、インド、インドネシア、日本からユネスコスクールを中心に参加校を募り、年度初めより校内や国内レベルでの活動を行ってきました。そして11月、海外参加校やコーディネーターを招いて東京で国際ワークショップを開催しました。

ワークショップでは、これまでの各校や各国レベルでの活動内容と進捗を共有した後、関心分野ごとにグループに分かれてディスカッションを行いました。今回の目標は主に2つ。1つは実際に活動をもっと進めるパートナー校と今後の具体的計画を立案すること、そしてもう1つは国際協働学習としての質を高めるために地球規模の課題をその活動のベースに据えることです。

30分間、スカイプ会議を○年生○名で、事前に調べた○○について互いに報告」などと具体的に決められたのは、やはり実際に顔を合わせ、カレンジャーを見ながら話し合った成果です。また、地球規模の課題を設定することも容易ではありませんでしたが、例えば、米や野菜の生産技術を調べる学習をするグループでは「生物多様性」、食の生産から消費までのサイクルを学習するグループでは「食品ロス」などの共通の国際課題が決められました。各校は学校活動を実施していく中で、これらの国際課題を自国に照らし合わせ、その解決のための道を探ります。

3日間の日程では、他に、参加校の一つである大田区立大森第六中学校を訪問し、生徒との給食交流や授業見学をしたり、他事業と合同でホールスクールアプローチの実践をテーマとしたワークショップに参加したりしました(P5参照)。活動計画の具体化という大きな成果とともに、ESDを軸とした授業づくりや学校運営についても学びを得て、参加者らは今まさにそれぞれの現場で活躍中です。

**DATA**

プロジェクト名: ESD Foodプロジェクト2016  
 テーマ: 食に焦点を当てた持続可能なライフスタイル  
 プロジェクト参加国および校数: タイ8校、インド8校、インドネシア4校、日本8校

国際ワークショップ日程: 2016年11月17日~19日  
 参加者: 参加校担当教員とコーディネーター25名(海外参加者9名含む)

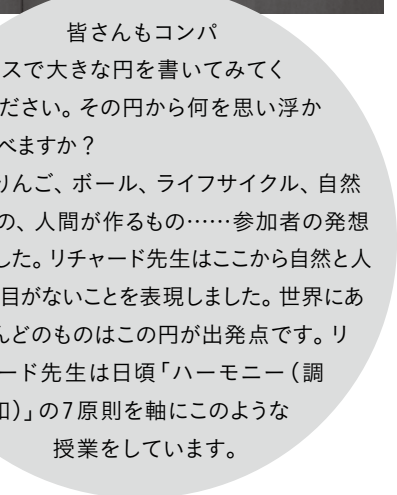


### リチャード・ダン氏による国際ワークショップ

## ハーモニーの7原則を軸に

11月19日(土)にイギリスから先進的なESDの取り組みをしているアシュレイ小学校校長リチャード・ダン氏を講師として迎え「学びの中心にESDを据えよう」のテーマのもと、国際ワークショップを開催しました。このワークショップにはESD

Foodプロジェクトメンバーのほか、サステイナブルスクールやユネスコスクールにも広く呼びかけ、翌20日に開催されたユネスコスクール全国ネットワークショップ強化会議(P8参照)出席の先生を中心に計48名が参加しました。



皆さんもコンパ  
スで大きな円を書いてみて  
ください。その円から何を思い浮か  
べますか?  
りんご、ポール、ライフサイクル、自然  
が作るもの、人間が作るもの……参加者の発想  
は多様でした。リチャード先生はここから自然と人  
間には境目がないことを表現しました。世界にある  
ほとんどのものはこの円が出発点です。リ  
チャード先生は日頃「ハーモニー(調  
和)」の7原則を軸にこのよう  
な授業をしています。

**Richard Dunne氏**  
イギリスで自然保護をはじめとした持続可能な社会づくりの先進的な取り組みを行なっているアシュレイ小学校(Ashley Church of England Primary School)の校長。同校はイングランド南東部、ロンドン近郊の公立校で、カリキュラムのみならず、学校の在り方(エネルギーや食、校舎・校庭、野外活動、グローバルな活動等)をもってESDに取り組むホールスクールアプローチの実践校。

リチャード先生はアシュレイ小学校の取り組みやチャールズ皇太子が提唱する「ハーモニー(調和)」の7原則を紹介されました。リチャード先生のワークショップはユニークで、コンパスで円を書いたり、野菜を半分に切ることで自然とのつながりや調和を考えたり、合間には全員で歌を歌ったりしました。例えばレモンやリンゴを輪切りにしてみると左右対称(シンメトリー)の幾何学模様が生まれます。その模様はとても調和がとれていて人に安らぎを与えます。シンメトリーが崩れると人には不安感が生まれます。ハーモニーが維持されていることはとても重要なことなのです。

参加した先生からは「日本の授業は生徒が質問に答えることに重きを置きすぎている。それより生徒が質問する力をつけることが大切だ」と言われたことが印象に残っ

ているという声もありました。最後にリチャード先生を日本に呼んでくださった聖心女子大学の永田教授から「リチャードの話を聞いて、これはイギリスだから可能だったと思っ



(教育協力部 本岡多津子)



# 広がる教職員交流

韓国・中国と積み重ねてきた国際教育交流事業に、  
昨年よりタイ、今年からインドが新たに仲間入りしました。

## 第2回タイ教職員招へいプログラム 教育現場での共感と驚き

本年度で2回目を迎える「タイ教職員招へいプログラム」。200名近くの応募者の中から選ばれた15名の教職員が来日しました。7日間の滞在で、学校や教科書会社、文部科学省などの訪問を通して日本の教育について理解を深めました。

人物交流部 齋藤 盛年

多摩市立東愛宕中学校訪問では、中学2年生を対象にタイ教職員によるタイ文化紹介授業が行われました。来日前からメールなどでやり取りをして、15人一丸となって準備してきたというこの授業。「輪踊り」を意味するラムウオンという民族舞踊を、きれいな伝統衣装を身に纏ったタイの先生と日本の生徒が楽しそうに一緒に踊る姿が印象的でした。同校以外に、青山学院高等部、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を訪問しまし

ました。そのほか、教育出版株式会社では、日本の教科書編集のプロセスや教科書の変遷について講義を受けました。

たが、日本では当たり前な毎日の学校生活がタイの先生方には珍しく映るようです。参加者のスモンワン・ジャンタガンさんは、「先生が生徒と一緒に教室の掃除をしているのを見て、自分を変えなければいけないと感じました」と語

### 日タイ教育交流会

関東のみならず各地から15名の日本の先生が参加した教育交流会。両国の教職員が友好を深めるとともに、ディスカッションでは今年も様々な発見がありました。

日本では授業参観があることに驚きました。タイでは一部の学校でオープンスクールという行事を行うことがあります。タイの先生

タイにも部活動がありますが成績評価の対象になり、入りたい部活に入れない場合もあります。日本では評価の対象にならず希望制のため入りたいところに入れる点が良いと思いました。タイの先生

違いが見られたと同時に、「どうして数学を勉強するのは？将来数学を使う場面ってあるの？」と生徒に疑問を投げかけられるというように両国間に共通した「あるある」も知ることができ、興味深いひとときとなりました。日本の先生

タイでは希望しない限り転動がないことや、教師は家族ともども医療費や大学までの学費が免除されるということに驚かされました。日本の先生



生徒に伝統舞踊を教えるタイの教員(多摩市立東愛宕中学校)

### インド教職員招へいプログラム

## インドとの交流、始動

国際教育交流事業に、今年からインドの教職員招へいプログラムが仲間入りしました。訪問先では、たくさん新鮮な発見があったようです。

人物交流部 高松 彩乃

### 多様なバックグラウンド

11月6日から13日まで、第二回目となるインド教職員招へいプログラムを実施しました。インド全土から14名の参加者が来日し、文部科学省を表敬訪問したほか、4校の学校を訪問し、文化施設の見学や日本教職員との交流を行いました。

インドでは、公用語であるヒンディー語、準公用語である英語のほか、22の指定言語が憲法で定められています。もちろん、参加者の母語も多岐にわたるため、このプログラムでは「英語による意思疎通が可能であること」を条件に参加していただきました。このように多文化の中で生活しているインドの先生方にとっては、多言語で教育を行うことが一般的です。一方で、日本滞在中に訪問した学校で行われている授業の

教授言語は、当たり前のように日本語であり、この点が参加者の目には新鮮に映ったようです。「母語をととても大切にしている点を参考にしたい」「英語など、ほかの言語での教育ももっと重視してもよいと思った」などの感想が出ていました。

### 日本の学校現場で

今回のプログラムでは、千葉県立船橋北高等学校(8日)、広尾学園中学校・高等学校(9日)、東京都荒川区立尾久宮前小学校(10日)、お茶の水女子大学附属中学校(10日)の4校を訪問しました。どの学校も、インドからのお客様をお迎えするのは初めてとのことでしたが、茶道部の生徒さんによるお点前の披露、インドにルーツをもつ生徒との対話、インド教職員による「インド式掛け算」紹介の機会、参加者に衝撃を与えた「生徒自らトイレ掃除を行う様子」の見学など、参加者が見たい・知りたい日本の学校の姿を見せていただきました。

訪問先の学校からいただいた「実際にインドの方の英語を聞く経験はとても貴重であった。私たちも自信を持って、英語を使ってみよう」と

いう感想が印象に残っています。インドの先生方と交流することによって、インドが身近になるだけでなく、自身が変わり、次のステップにつながる気持ちが生まれたということは、事業を実施している私たちにとって大きな喜びです。今回インドから来日した14名の参加者はもちろんのこと、日本で出会った方々が、新しい交流を深める担い手となってくださることを願っています。



参加者それぞれの母語で書かれた歓迎の看板とともに(荒川区屋久宮前小学校)

**DATA**  
プログラム名: 国際連合大学  
2016-2017年国際教育交流事業  
インド教職員招へいプログラム  
実施期間: 2016年11月6日~  
13日  
参加人数: 14名  
団長: プラモード・クマール・シャル  
マー氏(インド環境教育センター  
シニア・プログラム・コーディネ  
ーター)

**DATA**  
プログラム名: 国際連合大学  
2016-2017年国際教育交流事業  
タイ教職員招へいプログラム  
実施期間: 2016年10月4日~  
11日  
参加人数: 15名  
団長: ユバー・ボンセート氏(カンタ  
ンピッタヤゴン中学・高等学校)



## 「ESD推進の手引」を活用した研修 ESDを活用して 課題の解決を考える

教育協力部 篠田真穂

ユネスコスクール事務局として活動しているACCUには、ユネスコスクールに加盟したものの活動の継続が難しいという声が頻りに届きます。加えて、8月に行われた中央教育審議会特別部会では次期学習指導要領に関して、「ESDの考えを踏まえ」つつ、身につけるべき資質と能力に関して具体的な議論が交わされました。

ACCUは、「ESD推進の手引」を活用した研修事業を4月から全国5か所で行っています。

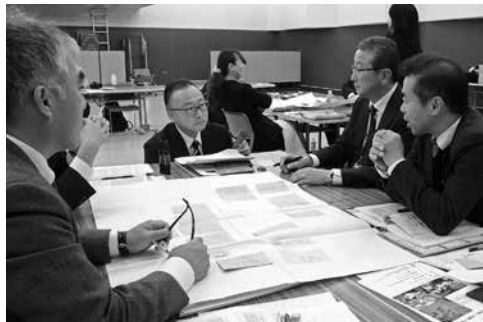
### 静岡県研修（10月7日）

東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター主幹研修員及川幸彦氏を講師に迎えた研修会には、約70名の県内指導主事の方々が参加されました。静岡大学が中心となり今年からコンソーシアムが立ち上がったことに加えて、本研修

が県内でのESD推進の原動力の一つになることが期待されます。

### 北海道東地区研修（11月2日）

福岡教育大学教授石丸哲史氏を迎え、羅臼町にて研修会を実施しました。世界自然遺産の知床半島の太平洋側に位置し、北方領土の国後島を望む雄大な場所です。約20名の教育委員会関係者、学校管理職の方々が参加され、羅臼のみならず、どの地域にも引用できるESDの可能性が語られました。



## 第10回全日本高校模擬国連大会 記念すべき 第10回大会を迎えて

模擬国連推進部 青木文

日本の国連加盟60周年という節目にあたる今大会では、事前にも外務省を敬訪問するなど、例年にも増して広報に力を入れて臨みました。第1回大会では28チーム計56名であった参加者数も、今回は86チーム計172名にも増え、開会式で全参加者が一堂に会した様子は壮観でした。

今年の議題は「サイバー空間」。陸、海、空、宇宙に続く「第5の戦場」とも呼ばれるサイバー空間のあり方について、高校生達が熱く議論を交わしました。最優秀賞に輝いたのは、渋谷教育学園幕張高等学校Aチーム（オランダ大使）と灘高等



学校Aチーム（ベラルーシ大使）。その他、優秀賞の受賞者を含む計12名の高校生達が、5月に米国で開催される国際大会へと派遣されます。国際大会で割り当てられているカーボヴェルデ共和国は、北アフリカの西沖合に位置する島国で、滋賀県程の面積の国です。余り耳にする事のない国ではありますが、今後のリサーチ能力も派遣生たちが試されることとなるでしょう。

### DATA

プログラム名：全日本高校模擬国連大会  
主催：ACCU、グローバル・クラスルーム日本委員会  
共催：国際連合大学  
実施期間：2016年11月12日～13日  
開催場所：国際連合大学 ウ・タント国際会議場、エリザベス・ローズ国際会議場  
参加者：高校生172名、引率教員約90名（全63校86チーム）、見学者約200名

## ユネスコスクール全国ネットワーク強化会議 ネットワークを通じて 得られるもの

教育協力部 本岡多津子

11月20日（日）に昨年度のユネスコスクール全国ネットワーク設立企画会議に続くユネスコスクール全国ネットワーク強化会議を開催しました。

午前に文部科学省国際統括官付の岡本彩氏から、ユネスコスクールはネットワークを通じて交流相手の良さを認め合い学び合うことが大切だという話がありました。

その後、ESDにホールスクーリングアプローチで取り組んでいる横浜市立永田台小学校の住田昌治校長のワークショップが行われ、気候変動や生物多様性などのテーマを通して質の高い教育についてグループで話し合いました。

午後からは全国のユネスコスクールから地域ネットワークが形成されているという報告がされ、全国ネットワークにむけて



広がりを感じることができました。その中にはユネスコスクールで学んだ子どもが先生になり、今やESDを教える立場になって学びが循環しているという大阪からの力強い報告もありました。各地の発表を聞いていろいろなアイデアが浮かんだ参加者も多いのではないのでしょうか。

## ACCU奈良・国際シンポジウム開催 国際社会は今 何ができるのか？

奈良事務所 研修事業部長 中井公

シリアでは、2011年に始まった内戦と、これに便乗したIS（自称「イスラム国」）の乱入で、国内各地の貴重な文化遺産も甚大な被害を蒙りました。とりわけISによる世界遺産パルミラ遺跡の破壊は、衝撃的な出来事でした。日本でも大きく報道され、皆さんの記憶にも新しいと思います。

の人材養成に、日本の支援を期待する声などが寄せられました。「2日でも早く、パルミラに人々が戻り、笑顔が見られる日が来ることを願っています」パネラーのひとりには、こう締めくくりました。

プログラム前半は、パルミラ遺跡の調査研究や保護に長らく携わってきた、国内外の専門家による報告です。なかでも、2016年3月のIS撤退直後に現地入りした、ポランド人研究者二人の報告が関心を集めました。爆破で砕け落ちた神殿や塔墓や記念門。叩き割られた彫像の散乱で、足の踏み場もない博物館。その惨状を捉えた映像に、会場は息を詰めました。

後半の意見交換では、将来シリアの文化遺産保護を担う若者たち



パルミラの博物館の惨状  
写真提供：Dr. Robert Zukowski  
(ポーランド科学アカデミー歴史文化遺産研究所)

### DATA

プログラム名：  
「シリア内戦と文化遺産」  
実施期間／場所：  
・2016年11月20日  
東京国立博物館、  
・11月23日（水）  
東大寺総合文化センター

\*1 優秀賞：浅野高等学校（ポーランド大使）、開成高等学校Bチーム（カナダ大使）、渋谷教育学園渋谷高等学校Aチーム（韓国大使）、桐蔭学園中等教育学校Bチーム（ブラジル大使）  
\*2 シリア中央部のホムス県タドモルにあるローマ帝国支配時の都市遺跡



# ACCUで社会人スタートしました。よろしくお願いします。

国際教育交流事業を担当しています。大学時代、平和研究や震災のボランティア活動をしているとき、国際的に教育支援や教育交流をしているACCUと出会いました。中国やタイの教職員交流プログラムに携わり、先生たちの子どもたちへのまなざしは、世界共通だと感じ、未来をつなぐ子どもたちを育てる先生方をサポートしたいと強く思いました。新社会人ですが、国際教育交流事業の発展に貢献していきたいと思ひます。



人物交流部 河川 枝里子  
教育協力部 篠田 真穂

教育協力部でESDの手引研修やODA事業の担当をしています。「国内外」関係なく、多様な子どもたちが多様に生きることのできる社会の構築とそんな学びの場がどこにでもある社会の実現を目指し、ACCUに就職しました。自分自身も持続可能な社会を構築する地球市民であるという自覚を持ち、日々考えたり迷ったりしています。多くの出会いがある場で働くことのできる喜びと感謝の気持ちを忘れず、一歩ずつ前進できればと思います。

## ACCU活動メモ 2016年9月～11月

①実施期間 ②主催、共催団体名 ③開催場所 ④参加国、参加者数

- 平成28年度日本／ユネスコ パートナースHIP事業推進委員会**  
ユネスコスクール支援事業(文部科学省委託)進捗状況を外部有識者からなる事業推進委員と委託元文部科学省職員とで確認し、課題を共有。  
①9月3日(土)、7日(水) ②文部科学省、ACCU ③日本出版会館 ④のべ16名
- ユネスコスクール年次アンケート会合**  
ユネスコスクール加盟校の実情を把握し、適切な支援が外部から提供されることを目的に実施している年次アンケートの内容に関する専門家会議を実施。  
①9月15日(木) ②文部科学省、ACCU ③ACCU事務所 ④7名
- ESD重点校形成事業 ～輝け!サステナブルスクール～**  
サステナブルスクールに認定された24校の校長・教員が一堂に会し、研修を実施。  
①9月22日(木) ②文部科学省、ACCU ③日本出版会館 ④50名
- 国際識字デーイベント**  
ユネスコが制定した国際識字デー(9月8日)に関連して、識字事業を行う3団体で実施。今年は日本国内での外国にルーツを持つ子どもたちの基礎教育の課題についても参加者と一緒に討議を行った。韓国派遣事業参加者のさいたま市立木崎中学校関根朱美先生も登壇。  
①9月30日(金) ②ACCU、シャンティ国際ボランティア会、日本ユネスコ協会連盟 ③パルシテム東京新宿本部 ④50名
- タイ教職員招へいプログラム**  
詳細…P6  
①10月4日(火)～10日(月) ②国際連合大学、ACCU ③東京都 ④15名
- 「ESD推進の手引」研修**  
詳細…P8  
〈静岡県〉①10月7日(金) ②文部科学省、ACCU ③総合教育センター ④約70名

- 〈北海道〉①11月2日(日) ②文部科学省、ACCU ③羅臼町 ④約20名  
**第2回若者プロジェクト国際委員会とワークショップ**  
詳細…P2  
①10月12日(水)～14日(金) ②ACCU ③東京 ④6名
- ユネスコスクール支援大学間ネットワーク (ASPUnivNet) 運営委員会**  
ユネスコスクール加盟校ならびに検討校を支援する大学のネットワーク(ASPUnivNet)の今年度下期の活動の課題ならびに来年度に向けての話し合いを実施。  
①11月6日(日) ②文部科学省、ACCU ③ACCU事務所 ④8名
- インド教職員招へいプログラム**  
詳細…P7  
①11月6日(日)～13日(日) ②国際連合大学、ACCU ③東京都、千葉県 ④14名
- 中国教職員招へいプログラム**  
〈第1班〉①11月7日(月)～13日(日) ②国際連合大学、ACCU ③東京都、高知県 ④20名  
〈第2班〉①11月28日(月)～12月4日(日) ②国際連合大学、ACCU ③東京都、奈良県、京都府 ④20名
- 第10回全日本高校模擬国連大会**  
詳細…P9  
①11月10日(木)、13日(日) ②グローバル・クラスルーム日本委員会、ACCU ③国際連合大学 ④172名
- ESD Food プロジェクト 国際ワークショップ**  
詳細…P4  
①11月17日(木)～19日(土) ②文部科学省、ACCU ③日本出版会館他、東京都内 ④4か国 25名
- 気候変動をテーマにした機関包括型アプローチ実践へ向けてのファシリテーター研修**

- ①11月19日(土)～21日(月) ②ユネスコ ③セネガル・ダカール ④12か国38名  
**ユネスコスクール全国ネットワーク強化会議**  
詳細…P8  
①11月20日(日) ②文部科学省、ACCU ③日本出版会館 ④30名
- 奈良 文化遺産保護に資する研修(集団研修)**  
「遺跡(遺構・遺物)の調査と保護」をテーマにした長期集団研修を実施。  
①8月30日(火)～9月29日(木) ②共催:文化庁、ACCU奈良事務所、イクロム、国立文化財機構東京文化財研究所・奈良文化財研究所③ACCU奈良事務所他 ④15か国から15名
- 奈良 世界遺産教室**  
ACCU奈良事務所主催の文化遺産保護の重要性を楽しく学んでもらう出前授業を実施。  
i①10月4日(火) ③奈良県立法隆寺国際高校3年生 ④40名/ii①10月17日(月) ③奈良県立桜井高校1年生 ④315名/iii①11月1日(火) ③奈良県立西の京高校域創生コース1年生 ④38名/iv①11月10日(木) ③奈良県立畷傍高校2年生 ④30名/v①11月21日(月) ③奈良県立奈良北高校 ④240名/vi①11月25日(木) ③奈良県立五條高校1年生 ④40名
- 奈良 文化遺産ワークショップ**  
フィリピン国内の文化遺産保護担当者を対象に「木造建造物の記録方法」をテーマにした研修を実施。  
①10月10日(月)～15日(土) ②ACCU奈良事務所、文化庁、フィリピン共和国国家歴史委員会 ③フィリピン(マニラ、カビテ州カウイト) ④15名
- 奈良 文化遺産国際セミナー**  
「シリア内戦と文化遺産—世界遺産パルミラ遺跡の現状と復興に向けた国際支援—」  
詳細…P9  
①11月23日(水) ②東京文化財研究所、奈良文化財研究所、文化庁、ACCU奈良事務所 ③東大寺金鐘ホール ④220名



## 心に届け! 「学び」が人を豊かにする

お話を伺った方: 木村 則昭氏(CSR推進部CSR推進室室長)  
若尾 久氏(CSR推進部CSR推進室担当課長)\*1

カシオ計算機株式会社CSR推進室では2007年から命の大切さを伝え、気付きと行動を促す体験型の出前授業「命の授業」を全国のユネスコスクール等で実施されています。この授業で使う教材として、ACCUの環境アニメーション教材 PLANET 『ミナの村と森』を選んでいただいたことがきっかけとなり、維持会員としてご支援いただいています。  
2004年にCSR推進室を設置後、テーマと対象範囲を拡大され、2015年からは各部門でのCSRの浸透を目的に、「CSRリーダー制度」を導入して活動の中核となる人材育成を行っ



若尾氏による「命の授業」の様子

ていらっしやいます。今後は、対象範囲を本社がある東京だけでなく、海外を含む他の地域や、子会社まで広げていく計画があり、実現に向けて準備をされています。  
電卓、電子辞書、電子ピアノなど「学び」と深くかかわりのあるカシオ計算機は、2015年に国連総会で採択されたSDGs(持続可能な開発目標)実現への貢献として、「すべての人に包括的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する(目標4)」を意識し、将来のカシオ製品ユーザー拡大も目指してCSR活動を展開していかれるとのこと。  
ACCUの活動紹介では、1000校目前となった日本のユネスコスクール加盟校の規模と活動内容に関心を寄せていただきました。持続可能な社会を築くためには、さまざまな関係者との協働が必要です。日本を含むアジア太平洋地域での持続可能な開発のための教育の推進と浸透に携わるACCUにとっても、大切な視点を伺うことができました。

ACCU: 進藤 由美(教育協力部・人物交流部部長)、松尾奈緒子(総務部)



### アジア 東奔西走 第11回

### 小笠原諸島、最高のフィナーレ

ACCU奈良事務所「世界遺産教室」講師  
フリーアナウンサー、世界遺産研究家  
久保 美智代



ポーンッ。船の汽笛が鳴りました。  
「いってらっしや〜い」と手を振る島民。「いってきま〜す」と応える観光客。これが、東京から南に1000km離れた小笠原諸島を出る時の別れのあいさつでした。  
太平洋に浮かぶ火山島の小笠原諸島は、日本に4件ある世界自然遺産のひとつ。一度も大陸とつながったことがなく、タコの足のような根のタコノキや、殻の形が変化している小さなカタツムリなど、生きものたちが固有の進化を遂げてきました。  
でも、ここに行くためには、船に24時間乗らなければいけません。海外に行くよりも遠い場所。そんな旅の最後は、感動でいっぱいになります。  
乗船前には、お世話になった方々から手作りのレイを掛けてもらいました。これを海に投げ、島に流れ着くと、再び戻って来られるそうです。港では、勇壮な小笠原太鼓が響きました。

出航すると驚きの連続です。港で手を振る人たちが小さくなると、近づいてきた堤防では、一列に並んだ子どもや若者たちが順番に飛び込みます。ふと気づくと、ツアーボートの群れが船に並走。どこまで来るのだろうか? と思った瞬間、ボートの人が次々と海にダイブ。クルッと回転したり、黄色いハンカチを振ったりと、まるで曲芸です。この別れは、船が出るたびの「恒例行事」なのです。  
これまで50か国以上、397か所の世界遺産を訪れましたが、こんな盛大な見送りは初めてでした。最高のサプライズに、「また来たい場所」ナンバー1になりました。

\*1 インタビュー当時  
\*2 小笠原村立小笠原小学校と母島小学校はユネスコスクール加盟校です。特に小笠原小学校の取組は2014年に第5回ESD大賞審査委員特別賞を受賞しました。